

コロラド家庭訪問支援プログラム

Colorado House Intervention Program

河崎佳子・三澤かがり 訳

目 次

第1部 早期支援—ろう児・難聴児をもつ家族に対する	1
家族中心支援（ビデオ邦訳）—	
第2部 ろう者・難聴者による支援—成人ロールモデルカリキュラム—	9
1. はじめに	10
2. プログラムの基本理念	10
3. 資格基準	11
4. 報酬	11
5. 研修	12
6. 家族への支援	12
7. さまざまなコミュニケーション手段の選択	12
8. 学校訪問	13
9. コミュニケーション方法の調整	14
10. 議論の争点となりがちな事柄をどう扱うか	14
11. ろう文化	15
12. 聴覚障害者自身の成長	16
13. 個人の背景	16
14. コミュニケーション形態	17
15. 社会的・情緒的支援	18
16. 参考資料の準備	18
17. 支援のポイント	19
付録1 アメリカ手話（ASL）	20
付録2 コミュニケーションのポイント	21
付録3 文化的差異	22

第1部 早期支援

ろう児・難聴児をもつ家族に対する家族中心支援

Early Intervention

Illustrated The Family-Centered Approach
for Supporting Families with Babies who are Deaf or Hard of Hearing

コロラド家庭訪問支援プログラム

Colorado House Intervention Program

(河崎佳子 訳)

The Home Team (ホーム・チーム)

Jan (Cole の母親) :

私たちは Cole の発達について理解しています。耳のきこえない彼が、今、どのような発達レベルにあるのかを知っているということです。彼がたてる様々な音、彼の動きの一つひとつに、十分な注意を払っています。子どもの成長に伴う変化のすべてを、しっかり見つめているのです。Cole のことは、私たち両親が一番よく知っています。いつも一緒にいて、どんな時も見守っているからです。子どもに関する学問的な専門家を 'professional' という用語で呼ぶなら、私は Cole に関する実践的な専門家 'expert' なのです。

ナレーター :

耳がきこえないと診断された子どもたちの家族は、生活のあらゆる場面で、変化を要求されます。情報として取り入れ、処理していかなければならないことが、たくさんあります。そして、新しい役割に慣れるには、時間がかかります。両親と早期支援の専門家との間に築かれる関係は、両親がそうした役割のなかで、子どもに対してどれだけ効果的に接することができるかに、大きな影響をもたらします。

Kris (早期支援の専門家) :

あなたが、今日やってみたいと言っていたことを試してみましょよ。どうなるかしら？ Cole はシャボン玉で遊ぶのがお気に入りでしたね。「もっとシャボン玉が欲しい」ってことを、彼がどうやって私たちに伝えてくれるかを見てください。

*

Mary Pat Moeller Ph.D. Director :

早期支援者の一番大切な役割は、家族に子育てにおける自信を持ってもらえるように支援することです。家族が自信を感じられるようになればなるほど、一日をとおして、子どもに多くのことを教え、発達を促すかわりができるようになります。子どもとのやりとりを心から楽しめるようになるのです。支援者が、両親の得意とする面をよく観察し、それを上手くフィードバックしていくことで、両親はどんどん自信を得ていきます。こうした支援こそ、私たちが果たすべき最も重要な役目だと思っています。

*

Teresa (Cody, Jake, Molly の母親) :

このプログラムへの参加は、今回で 3 回目になります。回を重ねる毎に、やり易くなってきました。毎回、少しずつ知識を得て、少しずつ自信がついてくるからだだと思います。早期支援の専門家がしてくれたことで、私にとって一番役に立ったのは、自分がしている

ことについての自信を与えてくれたことだと思います。時折、「私はいったい何をやっているのかしら?」「本当にこれでいいのだろうか?」と感じ、自分のしていることが馬鹿馬鹿しく思えてきたりすることもあります。手話を覚えようとした時もそうでした。特に、手話を習い始めたばかりの頃は、手話をしながら話すことは、私にとってすごく不自然なことだったので、人目にはバカに映っているんじゃないかと不安になりました。投げ出してしまいたくることが何度もありましたから、その時にいつも、「だいじょうぶ、あきらめないで。あなたはうまくやっているわ」と励ましてもらえたことが大きな救いでした。

*

Arlene Stredler Brown, Director :

セラピストというのは、コーチのようなものです。その役割は、観察し、何が起きているかを把握し、話し合うこと、そして、両親が取った言動の意味を、彼らに伝えていくことです。それが効果的な支援方法だと考えています。それに対して、両親も意見を返すでしょう。状況を再現したり、両親といっしょにやってみたりしながら、彼らのしたことがどういう意味をもつ行動であったのかを示していきます。そして、子どもの示した行動に注意を払い、なぜそうした行動が発達的に価値のある行動として歓迎されるのかを伝えていきます。私たちは、親のもつ技量を理解しながら、彼らを支援していきます。つまり、彼らは、自分たちが子どもにしたことの、正しかった部分を知っていくのです。親の良い面を強化し、彼らがもっとうまくできるように促すということです。こうした考えに基づく具体策を、家庭生活のあらゆる場面で応用していきます。両親から「本当にうまくやっているわ」、「私がこんなことをしたら、この子はこんなふうに応じてくれたのよ」といった報告を受けるようになるまで、私たちは、毎週、家庭訪問をつづけます。そんな報告が聞かれる頃には、両親は自分たちで築き上げてきたやり方を理解し、自ら実行するようになっていきます。

The Family-Centered Approach (家族中心支援)

ナレーター :

支援者は、聴覚障害をもつ子どもたちやその家族と、目的(ゴール)を共有する関係にあります。家族中心法(Family-Centered Approach)を用いることによって、早期支援の専門家たちは、家族が子どもとの効果的なかわり方を理解し、吸収していく可能性を最大限に引き出します。そうすることで、家族に、自信と実力をつけていってもらえます。

Pradeep (Ishan の父親) :

支援者は、僕たちが本能的に取っている行動が、間違っていないこと、あるいは、正

しい方向に向かっていることを確信させてくれました。「本当にこれで良いのだろうか？」と、自分では分からなくなってしまうことも多いので、それはとても役に立つんですよ。

ナレーター：

早期支援の専門家たちは、それぞれの家族に合ったゴールを模索していきます。そして、この家族中心法に基づく実践は、支援者と家族との間に信頼と思いやりを基盤とした良い関係を築かせてくれます。

Karen (Ishan の母親)：

支援者の存在は、私にとっても、重要な情緒的支えとなっています。彼女という時は、「母親」以外の面も受けとめてもらえるからです。私は、健聴（健常）児をもつ普通の母親ならば考えなくてもいいようなことまで、ずっと考えていなければなりません。ですから、彼女は、本当に有難い心の支えです。

*

Anne Marie (Yoel の母親)：

Yoel にどのような本を読んでやったらいいのか、彼の言語発達のレベルがどの程度なのか、今の Yoel にはどのような期待をもって臨むのがふさわしいのかなど、Kelly (支援者) は、色々なアドバイスをしてくれるので助かっています。私たち夫婦には Yoel の声はきこえないので、彼の発話、発声の発達の様子についても、Kelly から、手話と筆談を交えて情報をもらいます。彼女は、私たち家族にとってとても重要な存在となっています。

*

Sally & Jim (Jessi の両親)：

「あなたのやり方で大丈夫よ」「あなはうまくやっているわ」と、声をかけてくれる存在をもつことは、大きな励みになります。僕たちの娘 Jessi は、失敗に終わってしまった存在ではありません。彼女は、今まさに成長しているのです。この事実を確認できることによって、私たち夫婦は前向きな気持ちで Jesse を育てられるのです。

Natural Environment (慣れ親しんだ環境、無理のない場面設定)

Dinah (早期支援の専門家)：

家族がどのような日常スケジュールをこなしているかを知って、そのリズムやペースに添って支援していく姿勢が肝要です。彼らは今でも十分に忙しい日々を過ごしているので、むやみに新しいことを押しつけるのではなく、既に存在する日常生活のなかで、

子どもが言語、聴能、その他の学習を展開していけるような方法を見つけ出さなければなりません。

Mary Pat Moeller Ph.D, Director :

自然な環境で、すなわち日常生活の最も無理のない状況を共にしながら、両親にできることを見つけ出してもらうことが大切です。そのようにして発見し、自然な生活スタイルのなかで実践するやり方ならば、支援者がその場にいらなくても続けてもらえるからです。

Arlene Stredler Brown, Director :

子ども中心療法 (Child-Centered Therapy) の場合、自宅、またはクリニックで、セラピストは子どもと二人だけで面接をします。そして、面接が終了した後、セラピストは両親に、彼らがどんなことをしたのか、なぜそうしたのかを説明するでしょう。あるいは、セラピストと子どもの面接場面に親が立ち会う場合があるかもしれませんが、親は、セラピストがどのように子どもに支援するのかを、椅子に座って観察するだけです。一方、家族中心療法 (Family-Centered Therapy) の場合は、両親と子どもが共に遊んだり、やりとりしている場面に、セラピストが参加していくという形をとります。セラピストは、彼らのかかわりの中で、どのような相互交渉が聴覚障害をもつ子どもたちにとって効果的に働いているかを見つけだし、両親にフィードバックしていきます。

Identifying Family Strengths & Needs (それぞれの家族に固有の力とニード)

ナレーター :

早期支援の最大の目的は、わが子の聴覚障害を告げられた両親が、愛情と自信を回復して子育てに臨めるように、支援することです。多くの親たちは、こうした状況にも本能的に適応するものなので、支援者はそうした動きを見逃さずに、客観的、かつ説明的なやり方で、両親にそれを伝えていくことが大切です。すると、両親の有する潜在的な養育能力が力を発揮し始め、支援者は、両親と子どもの間に強い絆が築かれていくのを見守る役割に専念できるのです。

*

Mary Pat Moeller Ph.D., Director :

Molly があなたに向かって声を出したら、すぐに手話で答えてあげてね。

Teresa :

ええ、わかったわ。……… ほんとう!? 聞こえたわよ。………私は、娘 Molly にできる限り声を使って欲しいのです。それは私の目標でもあります。だから、彼女が声を出し

たときには、必ずそれに応えるようにしています。私が彼女の声を聞いてとても嬉しいんだってことを、伝えるようにしているんです。……ほら、みて！ 私の反応をみて喜んでくれるわ。

Marry Pat Moeller Ph.D., Director :

今のはとても良かったわね。あなたの表情が豊かで生き生きとしていたから、彼女も、見ていて楽しかったんじゃないかしら。

*

Pradeep (Ishan の父親) :

息子は本が好きなんですよ。

Denise (早期支援の専門家) :

それはきっと、あなた方夫婦の努力の賜物ね。彼が伝えようとするものをしっかりと受けとめて、それに応えてあげたり、彼の発声を繰り返し、かたどってあげたりすることで、彼に話す楽しさを教えたのだと思うわ。だから、彼は声や身ぶりを積極的に使って、あなた方の注意を引きつけ、会話しようとするのよ。

*

ナレーター :

親主導のゴールを設定し、それに向かって進んでいくためには、専門家の作った計画を押しつけるのではなく、個々の家族の選択を十分に尊重する姿勢が必須です。次に紹介するろう夫婦の場合、難聴の息子に発話を習得させることが、彼らの大切な目標の一つとなっています。

Yuzi (Yoel の父親) :

家庭においては、私たち家族全員がそうであるように、Yoel にもASLを使って欲しいと願っています。妻の父親も手話を使いますし、家では誰も声を使いません。

Anne Marie (Yoel の母親) :

私たち夫婦は共にろうですから、どのようにして息子に発話や言語を教えていくかは、切実な問題です。二人だけでは、どうしていいか分かりませんでした。でも、成長するにしたがって、いずれは彼も、声を使って話すことを求められることは分かっていました。ですから、彼には、英語とASLのバイリンガルになってもらいたいと思いました。そのために、息子を健聴児の通う保育園に入れ、スピーチ・セラピストに家に来てもらうことにしました。

*

ナレーター :

早期支援者と両親の協力によって展開するホーム・チーム・プログラムは、聴覚障害児

がコミュニケーション能力を発達させていくための、基盤づくりを目指します。しかし、この取り組みにおいて、けっして忘れてならないのは、きこえない子どももまた、チームの重要なメンバーの一人だということです。成長するにつれて、子どもが支援に対してどのような反応を示すかは、両親にとっても、支援者にとっても、自分たちの試みの試金石となってきます。子どもの発達を査定し、次の対応策を検討する際、子どもの示す行動は、ホーム・チームがうまく機能しているかどうかを知る重要なフィードバックとなります。

*

Jan (Cole の母親) :

最初の段階で、あまりにも多くのアドバイスを浴びせかけられると、しばしば圧倒されてしまいます。Kris (支援者) の場合は、「しばらく様子を見てみましょうよ。そうするうちに、Cole 自身が答えを示してくれるわ。手話でいくのか、トータルコミュニケーションでいくのか、あるいは.....」といった言い方をするだけでした。私は、そんな彼女のあり方が好きだったのです。

Arlene Stredler Brown, Director :

これこそが、早期支援者の役割です。家族に寄り添い、子どもがどんな発達をみせているのか、どのようなかかわり方があるのかを探り、目の前にいる子どもとその家族にとって最もふさわしい支援のあり方を見極めるのです。

ナレーター :

赤ちゃんとその家族は、それぞれに固有のニードをもっています。したがって、早期支援が目指す目標は、あらゆる状況に応用されるものでなければなりません。

The Parent Expertise (親の専門性)

子どものことを一番よく知っているのは家族であるという認識をもつことによって、信頼と思いやりが生まれ、相互に尊重し合える関係が培われます。

The Role of the Intervention Specialist (早期支援の専門家の役割)

支援者としての役割をきちんと理解することが大切です。その基本姿勢を保つことで、子どもとのかかわりを支配することなく、家族に適切なサービスや支えを提供できます。

The Natural Environment (慣れ親しんだ環境)

支援は、子どもや家族にとって馴染みのある、自然な環境で行います。それが最も効果的で、家族が独力で続けていきやすい方法なのです。

The Strengths and Needs of the Family (家族の力とニード)

個々の家族が求めているものを、その家族の視点から模索していきます。家族の求めに基づいて支援計画を立てれば、それにかかる家族の意気込みも変わってきます。その計画を、家族に合ったペースとタイミングで進めていくことによって、親-子間に最良の体験が蓄積されていきます。

The Home Team Advantage (ホーム・チームの長所)

両親を中心とする家族、子ども自身、専門家によって、チームは構成されます。無理のない設定で、それぞれがもつ力を結集させて、子どもの統合的な発達を助けるのです。

Mary Pat Moeller Ph.D., Director :

子どもの発達が目に見えるとき、家族は、その変化をそれまで積み重ねてきた努力の結果として受けとめることができます。そうした成果は、家族に自信を与え、継続への励みとなります。

Arlene Stredler Brown, Director :

全米新生児聴覚スクリーニング (Universal Newborn Hearing Screening) の制度ができたことで、私たちはこれまで経験したことのない興奮の時を迎えています。もう、言語発達の遅れなど、存在せずともよくなったのです。聴覚障害の専門家による支援を受けて育つ子どもたちは、就学年齢を迎える頃までに、かつての子どもたちとは異なる、まったく新しい存在になっていることでしょう。

[訳：河崎佳子]

第2部 ろう者・難聴者による支援

—成人ロールモデルカリキュラム—

Heather Abraham, Ann Pruitt,
Stephanie Olson, Jeanette Scheppach

2002年

協力団体：
コロラドろう・盲学校
コロラド州教育委員会特殊教育局

(三澤かがり 訳)

1. はじめに

「わが家は『ロールモデル家庭訪問』のおかげで、ろう者も成功者になれること、さまざまな仕事につきキャリアを積んでゆけるということを知ることができました。」
(CHIP プログラム関係保護者)

「家族に対して彼らがそれまで知らなかった情報を提供できたと思います。」
(成人難聴者ロールモデル)

「家族に勇気と理解を与えることができたと思います。」
(成人ろう者ロールモデル)

成人ロールモデルと保護者、生徒間の「コネクション（連帯）」は家族、子どもたちまた教師にとって聴覚障害について学んだり、ともに生活する際に重要な経験となる。ロールモデルは誕生直後から3歳までの子どもがいる家族と会ったり、共に課題に取り組むことでその家庭により影響を及ぼすことができる。絶望的な気持ちで障害を受け止め、子どもの将来に対して悲観的な気持ちになっている家族にとってロールモデルが提供する情報と社会的・情緒的支援は、非常に大きな意味を持っている。ロールモデルとの出会いを通して、聞こえなくても素晴らしい人生を歩むことができること、わが子にも明るい未来が開けていることがわかった、という保護者の声がある。

ロールモデルのもうひとつの役割は学校訪問である。生徒たちは自分の将来のさまざまな可能性に気づかず、ろう者との関わりがないため、ろう者独自の文化を知る機会がほとんどない、という報告がしばしば教師によってもたらされる。積極的に生きるロールモデルと会い、話し合うことで聞こえない子どもたち、聞こえる子どもたちそして教師もろう者や難聴者をより理解できる。

「ろう者・難聴者コネクション」は聞こえない子どもやその家族とロールモデルとの交流の機会を提供し、聴覚障害をもっている社会で十分に役立ち、成功できることを伝えたいと考えている。

2. プログラムの基本理念

「ろう者・難聴者コネクション」は聞こえない子どもやその家族に成人ろう者、成人難聴者との自然な交流の場を提供するために設立された。Colorado Home Intervention プログラム (CHIP) の子どもたちや公立学校の保護者、教師、関係者などは、ろう成人や難聴成人と出会い、交流を持つ経験が日常生活においてほとんどない。ロールモデルたちは自らの聞こえない体験を通して、聴覚障害を持つとはどういうことなのかを伝え、また必要ならばろう文化についての情報を家族に伝える。このことにより子どもたちそしてその家族が聴覚障害に対する前向きな受け止め方をすることが可能となる。この出会いの場

は家庭内であったり、学校であったり、また、聞こえない子どもとのピクニックなどの行事で行われる。

子どものコミュニケーション手段を選ぶのは保護者である、と考える。どのコミュニケーション手段を使うか、またいずれを選択するかに関して、ロールモデルは広い視野をもっていなければならない。家族とのコミュニケーション方法においても、家族の決定を尊重することが望まれる。成人ろう者・難聴者の役割は情報提供と支援にある。

コロラド聾・盲学校（CSDB）およびコロラド州教育委員会（CDE）はロールモデルプログラムの作成を目的とし、大人だけでなく子どもとも積極的に活動できる人材によって構成されている。彼らは、さまざまな環境にある人とも積極的に交流できることが必要となる。ロールモデルは家族、公務員また地方教育プログラムに携わる人たちとも協力していかなければならない。これらの人々はおおむね健聴者であるが、積極的姿勢をもって、協力しながら実践活動をしなければならない。手話をコミュニケーション手段とするロールモデルは手話通訳が用意されない場合もあることを理解してほしい。

このプログラムはコロラド州全域で利用可能なものであり、その制度が確立するまでは他州への派遣もできる。必要に応じて派遣増員も検討される。

3. 資格基準

CSDB はロールモデルとなる資格基準を以下のように定める。

- ・積極的な活動モデルを示すためにはモデル自身が専門職を有している、職業についている、正規の学生である、あるいは自立した主婦であることが重要である。
- ・関わる家庭の価値観を尊重すること。
- ・コミュニケーション方法の選択においては家族に助言・支援をおこなうことができること。
- ・公立ろう・難聴学校のプログラムに対する支援をおこなうことができること。
- ・公立学校プログラムや家族支援プログラムで働くことに興味をもっていること。
- ・有資格手話通訳者の有無にかかわらず、他者とコミュニケーションがとれること。
- ・CSDB 主催の研修やワークショップに参加できること。

4. 報酬

ロールモデルへの報酬は提供するサービスに応じて二通りある。

- ・学校や生活の場に入り、聴覚障害についての問題を話し合うこととなる家庭訪問や学校訪問においての報酬は通常 \$ 35.00/時間とする。
- ・家族が交流を目的とした行事などに参加する場合の報酬は\$50.00/時間とする。その際のロールモデルの役割は家族との交流であるとともに家族から提示されるさまざまな質問や疑問に答えられることが望まれる。活動の期間はそれぞれの内容により異なる。
- ・家庭訪問やイベントへの参加の際の交通費は別途支給されない。

5. 研修

プログラムの目的を理解し、家族と快く交流ができるために定期的会合、研修、ワークショップなどが行われる。こうした機会にプログラムの基本姿勢や要望などが検討される。

さらに学校訪問や家庭訪問を進める時の考え方、ロールモデル自身が自分自身をどのように感じているか、それが子どもや家族にどのような影響を与えるか、わが子が聞こえないと知らされたばかりの親とどのように接するべきか、聞こえる生徒、教師、公的機関の人々とどのように関わっていくか、などを話し合う。また、話し合いを通して、成人ロールモデル同士が協力しあい、ネットワークを作ることができる。家庭訪問の前には少なくとも一回はこの研修に参加しなければならない。

6. 家族への支援～家族の方針を尊重する

家族との共同活動において大切なことはそれぞれの両親や家族の有している価値観や文化を尊重することである。ロールモデルは個々人、経験や個性や意見そして技能を持っているが、それらにこだわることなく心を開いて聴覚障害について学ぼうと努力している家族を支援するという姿勢が重要である。コミュニケーションシステムや教育体制、または聴覚活用機器などの情報提供においても、偏見を持つてはならず、あくまでもその家族のゲストとして家族とともにいる、ということを常に心にとどめておくべきである。家族以外の人が家に入っていることへの不安や居心地のわるさを理解し、安心できるように努力しなければならない。

7. さまざまなコミュニケーション手段の選択

子どもが3歳以下の家庭の場合、コミュニケーション方法の決定においては子どものニーズに合わせた両親の選択を尊重すべきであるとコロラド家族支援プログラム（CHIP）は考える。どのような情報保障手段を選ぶか、コミュニケーション手段は何を選ぶか、そして聴覚活用機器の選択についても両親、専門家そして客観的なデータを参考に考えていかなければならない。

支援者は選択肢についての明解な偏見のない情報を家族に提供することが望ましい。また、その決定は変更可能であり、実際に変更していくものである。子どもの成長を客観的に観察し、一人一人のニーズに合わせたプランが選択できることが重要である。

家族を専門的に支援するとき、ロールモデルは常に心を開き、家族の選択に協力をしなければならない。コミュニケーション手段をどうするか、学校をどうするかなどの教育面の選択、聴覚活用機器をどれにするか、などの決定はロールモデルの仕事ではない。中立の立場で積極的に個人の経験を話し伝えることが仕事である。

8. 学校訪問

(1) 多様な教育の場

子どものために両親が選ぶ教育の場は多種多様である。コロラド州において子どもはいろいろな状況下で学校に通っている。

普通学校に聞こえない子どもが一人だけ通っているケースもあれば、公立学校に複数の聞こえない子どもが通っている場合もある。生徒全員が聞こえない子どもという私立学校もある。そのため、学校という集団の場においてロールモデルはろう児だけでなく難聴児や聴児とも関わりあいを持つことになる。モデルは学校で使われているコミュニケーション方法に慣れると同時に聞こえない子どもに対して周りが使っている手段にも慣れなければならない。自分たちが選択した教育の場は子どもにとって最善であると両親は思っているのだから。

(2) どうして学校でロールモデルが必要なのか

その理由はさまざま挙げられよう。生徒に、立派に成長した聴覚障害成人のモデルと会わせたいと願うのも一つである。成人モデルにその人の生い立ちを話してもらいたいと考える人もいる。手話のできる大人から手話でお話しをしてほしいという子ども、そして、ただ聴覚障害について知りたいという場合もある。ロールモデルはいろいろな人々とさまざまな状況のもと、柔軟に対応できることが望まれる。

(3) CHIP 助言者／教師との連携

ロールモデルの訪問は家族や生徒とともに活動している助言者や教師によってリードされる。家族や生徒のニーズがどこにあるのかを判断する。家族や生徒がロールモデルに会いたいと要望が出されれば、彼らはプログラムのコーディネーターとコンタクトをとり、訪問日を設定する。ロールモデルに会いたいという理由はそれぞれ異なっている。ある時は子どもと同じ聞こえないという障害を持つ人に会いたいということもあれば、同じコミュニケーション方法を持つ人に会いたいということもある。同様の家族環境や経験を持っている人に会いたい、または成功した聴覚障害者に会いたいということもある。

理由の如何に関わらず、助言者や教師は訪問以前からその期間中、大きく関与するわけである。かれらは訪問やイベントの前にロールモデルと会い、家族や学校についての情報を提供する。ロールモデルからコンタクトをとり、さらなる情報をもらうこともできる。この情報の交換は訪問やイベントが成功するためにはとても大切なことである。時として教師側がロールモデルに期待していることがあり、それがロールモデルにとって初めてで、自分には合っていないと感ずることがある。どのような要望や期待があるのかを前もって話し合っておくことが重要である。特にそれが子ども一人が相手であったり、少人数のグループの場合にはさらに大きな配慮が必要である。

(4) 家庭訪問やイベントの際の質問事項

- ・家族のだれがロールモデルの家庭訪問に参加するか？
- ・子どもの聴覚障害の状態と家庭内のコミュニケーション方法は？

- ・話し合いたい内容は？
- ・特に取り上げて話し合いたい問題点や悩みは？
- ・持参してほしいものは？（写真、FM システム、TTY など）
- ・ロールモデルは何人か？
- ・手話通訳者がいなくても話し合えるか？

（５）学校訪問の際の質問事項

- ・生徒の数は？
- ・生徒は口話か手話か、または難聴児か？
- ・補聴器、人工内耳、FM システムか？
- ・訪問時に手話通訳はいるのか？
- ・ロールモデルに何を期待しているのか？（訪問のねらい）
- ・持参してほしいものは？
- ・時間はどのくらいか？

プログラム成功のためにはざっくばらんな意見交換が大切である。訪問に関するものであれば、どのような考えも要望も出し合うとよい。家族の要望に合う結果が得られたかは常にコーディネーターによってフィードバックされる。

9. コミュニケーション方法の調整

訪問に関わる人々すべてに対応するコミュニケーション形態を調整することが重要になる。ロールモデルは手話通訳が必要となれば教師およびろう者／難聴者コネクションのコーディネーターにコンタクトをとる。学校訪問においては、学校側が責任を持ってコミュニケーションが円滑に進むようにセッティングをする。ロールモデルが自分のコミュニケーション手段がどのようなものであるかをあらかじめ学校へ知らせておきたいと考えたときには、ろう者／難聴者コネクションのコーディネーターが可能な限りの手続きをし、トラブルのないようにつとめる。家庭訪問においては助言者が通訳を行う。

難聴者が個人のFMシステムを持っている場合は、それを持参することが有効である。子どもたちは、大人が自分たちの使っているものと同様のものを使っていることに共感を覚える。家庭においては補聴機器を両親が見たことのないケースが決して少なくない。どのように作用するかを見たがるものである。

10. 議論の争点となりがちな事柄をどう扱うか

両親は議論の争点となりがちな問題について聞きたがる。人工内耳をわが子にさせたいが、ロールモデル自身はどう思うか、といった質問をする。補聴器についても、どのタイプがよいかとアドバイスを求める。手話がいいか、聴覚口話法がいいかということ聞かれることもある。

人に影響を与え、その行動や決定を左右するのが訪問の目的ではないということをしつかりと念頭においておかなければならない。一人一人自分の意見を持ち、手話や補聴器、人工内耳、教育環境などに関しては信念を持っているのであるから、社交的な雰囲気の中で自分の意見を自由に言うようにすることは大切なことである。また、悩んでいる家族はロールモデルがその経験に基づいて自分たちの問題についても考えを話してくれることを期待している。経験を話してあげるとはかまわないが、他の人は違った意見を持っているかもしれない、一人一人考え方は異なっている、ということをお必ず強調すべきである。かれらがもっと他の情報を得、他のロールモデルと会ったり、いろいろな会合に参加するなどができるように勇気づける。

例：両親が尋ねる「うちの子に人工内耳の手術をすべきでしょうか？」

- ・ **偏った答え方** 「私は人工内耳をしていないし、必要とも思いません。なくてもやっていけるのではないのでしょうか。これまで着用した経験もないし、それで十分やっています。人工内耳をしている人をたくさん知っていますが、どうも役に立っていないようです。むしろよくないようです。」
- ・ **中立的な答え方** 「お子さんにとってどうすれば一番よいのかをお話することはできません。私がお話しできるのは自分自身の経験です。私は人工内耳は使用していません。それは自分には合わないと思うからです。また別の経験を持っている人のお話を聞くのもよいと思います。」
- ・ **偏った答え方** 「私自身は補聴器を使っていますが、人工内耳がとてもよい、と言う人をたくさん知っています。私たちは聞こえる世界に生きている訳ですから、やはり他の聴者と同じように聞こえるようにしてくれる人工内耳はよいと思うのです。子どもにはできるだけ聞く訓練をするのが重要でしょう。」
- ・ **中立的な答え方** 「お子さんにとってどのようにしたらいいかをお答えできません。私がお話しできるのは自分自身の経験だけです。人工内耳を使用してそれが合っている人にも会いました。実際に人工内耳をしている人の話を聞くのがよいでしょう。」

11. ろう文化

アメリカ手話 (ASL) を共有し、文化的なアイデンティティーを持つろう者は、家族や子どもにとって独自の見解を持っている。聴者は言語学的に社会的にまた政治的にろうコミュニティが存在することを知らない。ロールモデルは誇りをもって自分の文化について語り、どのような影響を受けてきたかを伝えることに躊躇を覚える必要はない。ASL が音声言語とどのように異なるかを教える、ASL ジョークや詩を話して聞かせる、ろう者とのつき合いの逸話を聞かせてみる、ろうコミュニティの一員であるとはどういうこと

なのかの一端を述べてみる、こういったことが聴者にとって大変参考になるであろう。

12. 聴覚障害者自身の成長

これが唯一だ、という状況は聴覚障害者にはない。学校においても聴覚障害児が他にいないという子どももいれば、仲間の生徒がいるという学校もある。いろいろな教育的支援を受けられている子どももいれば、支援を受けられず孤独な子どももいる。その環境は家族環境の変化、学校や就労状況に応じて時間とともに変化するものである。ロールモデルを経験した難聴者の多くは、その経験をとおして、彼ら自身が自分にとっての最大の支持者となる。それは、ロールモデルとして機能する体験をとおして、自らの障害を受け入れ、理解し、自分にとってもっとも必要なものは何かを考え、それに向かって努力するようになるからである。最終目標は自己実現を体験し、誇りをもつことである。

13. 個人の背景

簡単な半生記録を書くことも役に立つ。自分の生き立ちについて思いを馳せてみよう。さらに失聴に関するもので家族や生徒がおもしろいと思うエピソードなども織り込んでみよう。

自分史に盛り込む内容

家庭について：

- ・どこで生まれたか？
- ・どこで育ったか？
- ・どこでくらしただか？
- ・どこに住んでいるか？

家族について：

- ・家族は何人か？
- ・兄弟構成は？：長男／長女、真ん中、末っ子、一人っ子
- ・家族に聴覚障害者はいるか？

〈ヒント〉写真を用意するのもよいであろう。子どもの頃の写真と今の家族の写真

学校について：

- ・通った学校は？
- ・FMシステム、手話通訳、ノートテイクなどの利用経験は？
- ・あなたの他に聴覚障害児は学校にいるか？それについてどう感じているか？
- ・修得学位は？
- ・学校で体験した困ったこと、よかったこと？
- ・好きな科目は？

職業について：

- ・これまでの職歴は？
- ・今の職業は？
- ・職場でのコミュニケーション方法は？
- ・仕事のやりがいは？
- ・これからの夢は？

活動／趣味について：

- ・好きなことは？
- ・聴覚障害者団体やろう者団体に加入しているか？
- ・行事や会合には参加しているか？

〈ヒント〉スポーツや旅行、趣味の写真を持参するとよい。ねらいは、聞こえなくても充実した幸せな生活を送っている聴覚障害者像をとらえることにある。

日常生活について：

- ・目覚まし時計はどのようにしているのか？
- ・学校や職場でどうしているのか？
- ・テレビや映画はどのように楽しんでいるのか？
- ・手話通訳者を利用しているか？もし利用しているのならば、依頼すると決める基準は？
- ・社会的活動には参加しているか？
- ・結婚しているか？
- ・子どもはいるか？

14. コミュニケーション形態

家族や生徒たちがもっとも知りたいと思うことはおそらく、ロールモデルが他者とどのようなコミュニケーション方法でやりとりをしているか、ということであろう。家庭訪問を依頼するときに、重要な視点となるのはコミュニケーション形態である。わが子とおなじコミュニケーション方法をとっているロールモデルにきてほしいと思う一方、全く異なった方法を使っている人にも会いたいと思うものである。どのような方法であっても、自分の経験を語る事が最も大切で、コミュニケーション形態についての一般論を述べることは避けるべきであろう。

口話法のロールモデルがいた場合、家族や本人の関心は、いったいどのように話し方を覚えたかということである。補聴器の活用、スピーチの練習、どのくらいの期間を要したかなどを聞きたがる。そこで、ロールモデルはどのように話し方を覚えたか、読話や補聴器にどのくらい頼っているか、また自身の障害についても詳しく説明しなければならない。テクノロジーの側面からもいろいろと情報を与え、補聴器に電話も聞こえるスイッチの有無や TTY ではどのように電話が聞こえるのかなど。また、そのほかの質問は手話に関するものが多く、どういったときに手話を使うのかなどの質問が多い。

手話をコミュニケーション手段とするロールモデルに出会えば、家族や本人の関心はどこで手話を覚えたかとか何歳の時から習い始めたのか、ということが多い。どのように友達と知り合い、友人関係を築いてきたのかというもの知りたがる。手話が毎日の生活にどういった影響を及ぼすのかも興味のあるところである。

15. 社会的・情緒的支援

社会的・情緒的支援は学校よりも家庭訪問の場で重要な意味を持っている。聞こえない子どもを持った両親はショックをうけ、混乱している。彼らは、子どもの将来に対して持っている自分たちの疑問や不安の答えをロールモデルが出してくれることを期待している。ロールモデルが語る経験を通しての意見を喜んで聞き、情報を得たいと考えている。もし、否定的な経験ならば、それはそこから学べるものがある。聞こえないためにいじめられた経験があればそのときにどのように解決したかを語るとよいであろう。先生の質問が聞こえないときにはどのように対処したかを話して聞かせるのもよい。困難な状況を克服したこと、まわりの援助について話し合うのは両親にとって救いとなるが、それが決して「こうあらねばならない」こととして呈示しないよう注意しなければならない。

また、様々な状況のもとで、ユーモアによって自分たちの困難がいかに救われたかという話を織り交ぜるのもよいだろう。家族や本人たちはコミュニケーションのずれがいかんにして起こり、誤解が生じ、手話が間違っている、終わりよければすべてよしとなるのを聞くのもおもしろい。コミュニケーション上の誤解があっても、それでこの世の終わりではない。聞こえないという現実も、おもしろい話を聞くことで、心が安まるということがある。こどもが生まれてからほとんど笑ったことがないという両親の話聞いたことがある。

家族に聞かれた質問に対して、快く返答できないと思ったり、それについては話したくないと思ったときは遠慮なくその旨を告げるとよい。また支援中にアドバイスを受けられるよう助言者や教師に相談することもでき、それにより家族や本人ともよりよい関係になるであろう。

16. 参考資料の準備

聴覚障害に関係する団体とコンタクトをとったり情報を知ることでもまた手助けとなる。ロールモデルはこういった聴覚障害に関する適切な情報を呈示することができる。小さな「図書館」を携えて家族や学校へ支援訪問することも援助となる。その内容は「押しつけ」ではなく、どういったことがあるか、どんなものが手にはいるかと示すためのものである。

参考資料の例：

- ・聴覚障害に関するホームページ

- ・聴覚障害者団体の発行する会報や雑誌（アレキサンダー・グラハム・ベル協会、全米ろうあ連盟、聴覚障害自立センター、『ヒアリングヘルス』、手と声、『ろう者の生活』等）
- ・ADCO 発売の出版物や支援グッズのカタログ、コロラド唯一の製造販売団体 カタログにはホームページアドレスと申し込み用紙が入っている。
- ・実物の呈示：TTY や個人携帯の FM システム、目覚まし時計など
- ・聴覚障害児に関する記事の切り抜きやマーリー・マトリンやヘザー・ホワイトストーンなどの成功を祝う記事。HIP 誌なども最適。

17. 支援のポイント

①まず準備！

あなたは支援する生徒や家族について集められるだけの情報を収集しておくこと。だれでも心を開いて接すればコミュニケーションできる。自分自身についても相手に伝えよう。そうすれば期待は現実のものになるであろう。

②小道具も用意！

聴覚障害、団体に関する情報やグッズを持って行こう。小さい頃の写真、今の写真、家族写真、スポーツなどの写真などを持って行こう。補聴器などの器機、そしてもしいれば聴導犬もよいだろう。とにかく、あなたが聞こえる人とは異なるのだと感じさせるものであればなんでも持って行こう。

③聞こえない子どもを巻きこもう！

彼らをスターの気分にしてあげよう。今まさに彼らが主役なのだから。

④カメラを持参！

写真を撮って、後で送ろう。

⑤小さな手みやげを！

少人数であればちょっとした手みやげを持って行こう：ASL の書いてある鉛筆やろう者に関する絵の描いてある T シャツ、ADCO 製造のアクセサリなど。ただし、手みやげは支援者の選択に任されるもので訪問の必要条件ではない。

⑥家族や教師に対する事後フォローを！

訪問のお礼と聴覚障害について学び続けてくれるように励ましを送ろう。かれらも感謝を表してくれるだろう。

付録 1 : アメリカ手話 (ASL) 資料

アメリカ手話 ~その歴史、文法そしてコミュニティー

①ASL とは？

- a. 視覚的身ぶり言語
- b. 手指、腕、目、顔、頭、身体の特異な動きと形
- c. 音声に代わる身体の動き
- d. 目から入る言語的情報

②ASL の歴史とは？

- e. トーマス・ホプキンス・ギャローデットが 1817 年渡仏し、ローレント・クラーク (フランスのろう教師) と会う。その後、二人はコネチカット州ハートフォードにおいて最初のろう学校を設立。
- f. ASL の 60% はフランス手話が語源。40% はその他から。

③ASL はだれが使っているのか？

- g. ろうコミュニティーの聴覚障害者
- h. ろう文化に属するろう者
- i. 親戚 (両親、姉妹、兄弟、叔父、叔母)
- j. 聴覚障害者 / ろう者とともに仕事をする人々
手話通訳者、教育者、教師

④ろうコミュニティー / ろう文化とは？

- k. ろう者および難聴者個人
- l. 共通言語を共有
- m. 相互交流時の共通手段
- n. 共通経験と価値観
- o. 聴覚学上の聴覚障害ではなく態度に表れた聴覚障害
- p. ASL を知っていること、使用できること (主たる特徴)

⑤ASL の要素とは？

- q. 手指の形
- r. 手のひらの向き
- s. 動き
- t. 位置

付録2：コミュニケーションのポイント

失聴によって人は音を媒体とする情報を得る能力が著しく低下することを覚えておかなければならない。そのため、聴覚障害者は話しかけられたとき、相手の言っていることを理解しようと視覚に頼ることになる。ほんのちょっとした配慮によって聞こえない人たちはあなたの言うことが明確に分かるようになる。

- ① 軽度の聴覚障害であっても、話されていることを理解する力は低下することを知っておくこと。補聴器は聴力を取り戻す機器ではない。
- ② 話し始める前に、必ず聞こえない人の注意を自分に向けさせること。肩や腕を軽くたたいたり、手や紙を振ったりまたは近くに寄って気づかせたりということをする。
- ③ 聞こえない人と顔を合わせ、会話の間は視線をはずさないこと。手話通訳者に直接話さず、常にろう者に向かって話すこと。
- ④ 聞こえない人のすぐそばに立たないこと。あなたと聞こえない人の間に遮蔽物がないようにする。黒板に何か書いているときには話さないこと。
- ⑤ あなたの口元や顔がはっきりと見えるかどうかを確認すること。話しているときは食べたり、たばこを吸ったりまたはガムをかんだり、口元を手で覆ったりしないこと。
- ⑥ 明るい場所に立つこと。電灯や窓などの光源となるものを背にして立たない—顔が影になり、はっきりと見えない。
- ⑦ 静かな場所で会話をする。背景の音にも気を遣うこと。
- ⑧ はっきりと、しかし普通通りに話し、口の動きを誇張しすぎないこと。
- ⑨ 声も出すが、大声の必要はない。音声を聞き取ってそこから情報を得る聴覚障害者もいるので声も出すとよい。しかし大声は語の音や口形を歪ませたりするので避ける。
- ⑩ 顔や身体表情をつけることであなたの伝えたいことがはっきりする。恥ずかしがらずに表情を豊かに。
- ⑪ あなたの言うことが伝わっているか、ただ頷いているだけなのかをしっかりと見極める。頷いていても言われていることが必ずしも分かっているとは限らない。
- ⑫ 初めての場面では、技術的な難解な単語を黒板に書かないこと。長い、一般的でない言葉は分からない場合もあることを知っておく。
- ⑬ 聞こえない生徒が分からなかった文章は繰り返して呈示するが、同じ文脈で何度も言わないこと。
- ⑭ 必要ならば鉛筆と紙などの視覚的な補助用具を使う。書き止めることを躊躇しない。
- ⑮ TDD やテレビ、デコーダー、フラッシュベルなどの聴覚障害者に有用な器機を取り付け、有効に使えるように設置する。

付録 3 : 文化的差異

* ろう者の特徴を知り、理解することにより、より円滑に違和感なく交流ができる。

ろう者

気取らない—誤解をまねかないように「社交的な気取り」は避けること

些細なことも皆が共有し、わかりきったことも話し合う

遠慮なくものを言い、場を離れるときはその理由をはっきり言う（会合、教室、手洗い）

鼻を動かす

長居する

相手に分からないように指し示すときは表情や目の動きで（半手話）

言語学的機能、顔の表情、（眉の上げ下げ、口を開ける、目を見開く）

会話中に視線をはずすのは非礼—話しを聞いていないことを示す

注意喚起のために身体接触をする

手を振る、床を踏みならず、電気の点滅

話しながら歩く、ゆっくりと離れて

明るく広い台所に集う

本題にすぐ入る

聴者

礼儀正しい、ことさら物事を論争として取り上げない。

わかりきったことは取り上げない、言うまでもないと考える。

静かにその場を去る。

「はい」と言ったり頷く

長居はしない

ささやき

音声のイントネーション

視線をはずしても容認する

身体接触は避ける、個人の空間を重視

大声を出す

近くに並び、早く前を向いて歩く

音楽やテレビが見られる居間に集う

前置きのあとに本題に入る

[訳： 三澤かがり]

日本語版編集を終えて

今回、新生児聴覚スクリーニングに関する厚生労働科学研究の主任研究者である三科潤先生（東京女子医科大学母子総合医療センター）より、コロラド家庭訪問支援プログラム（CHIP）に関する2つの資料を提供いただき、その邦訳・編集を行う機会を得た。

ひとつは、コロラド州で実施されている「家庭訪問支援プログラム」に関する解説ビデオであり、もうひとつは、ろう者・難聴者本人（いわゆるレイ・エキスパート）によって実施されている「成人ロールモデルカリキュラム」の解説書である。そこで、前者のビデオの邦訳を聴覚障害者カウンセリングに通じている河崎佳子（京都女子大学）が、後者を手話通訳士の資格を持ち、英文翻訳とASL（アメリカ手話）に通じている三澤かがり（大塚ろう学校）が邦訳した。

今、ろう学校では、「特殊教育から特別支援教育へ」という枠組みの変化、「場から個のニーズへ」というコンセプトの変化の中で、ろう学校でも家庭訪問支援を実施したり、サテライト教室を開設するなど「個のニーズ」に対応した支援を行う機運が高まっている。

しかし、このような支援はまだ端緒に着いたばかりで、支援の中身についての実践的・研究的蓄積はほとんど皆無といってよい。その意味で、これら二つの資料は、概要的な資料であっても貴重な情報を提供するものとなるのはまちがいない。とくに、これら支援プログラムに示されている支援者側からの情報提供や意見提示のあり方は、あくまで相談当事者個々の選択を重視した公正中立なものであり、その意味では「成熟した」支援と呼びうるものであろう。この点において、ともすれば保護者の心理やおかれた状況に対する配慮よりも、支援者の個人的な意見や価値観を優先してしまいがちなわが国の医療・療育・教育関係者に、多くの示唆を与えるものとなっている。ご一読いただければ幸いである。

なお、第2部「ろう者・難聴者による支援」は、原題は“Deaf/Hard of Hearing Connection”であり、立派なろう者・難聴者に育つために必要な、ロールモデルであるろう者・難聴者による支援（関係づくり）といった意味があるが、解りやすくするために改題した。

2006年3月

木島照夫（大塚ろう学校・全国早期支援研究協議会）